

第21次 高校教師海外研修視察報告書

昭和60年度

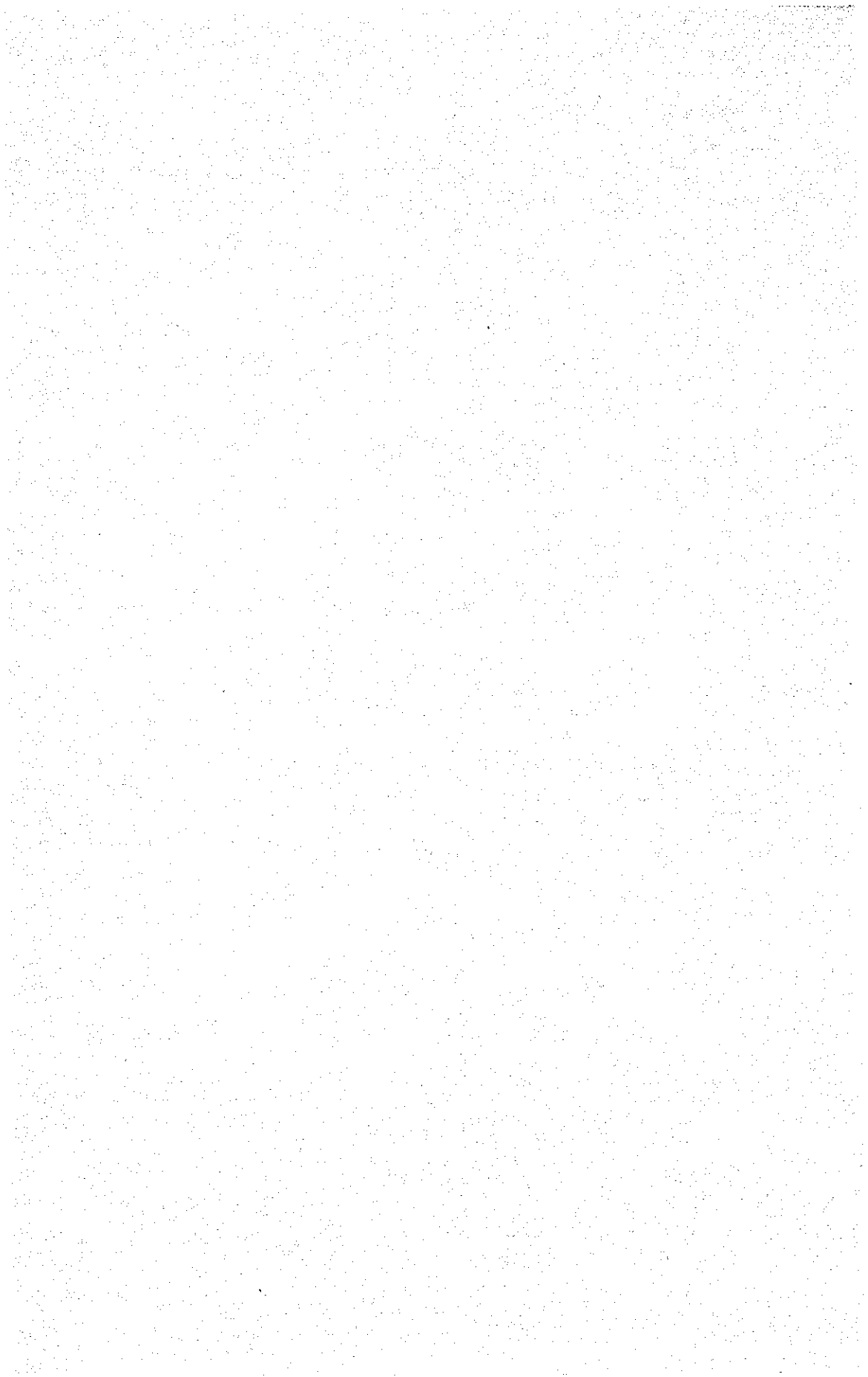
国際協力事業団

広報

TR

86-11

RY



第21次 高校教師海外研修視察報告書

昭和60年度

国際協力事業団

JICA LIBRARY



1005489181

国際協力事業団	
受入 月日 '86. 6. 17	000
登録No. 12744	36
	GAP

はじめに

当事業団では、国際協力の理解に関する啓発事業の一環として、次代を担う青少年の国際理解と協調の精神を培うための実践を行っている全国高等学校国際教育研究協議会加盟校の教師の方々に、昭和40年度より海外における協力の現場を視察いただいております。

この視察により、当事業団が行っている技術協力、無償資金協力及び移住事業等の国際協力の現状や訪問国の経済、社会、教育等につき広く見聞していただき、高校生に対する指導に役立てていただいております。

本年度は東南アジアに6名、中南米に4名の先生を派遣しましたが、これら先生方よりいただいた報告を取りまとめました。この報告書が今後の国際教育の資料として広く活用されることを願う次第です。

昭和61年3月

国際協力事業団

総務部長 田島高志

目 次

1. 視察日程

2. 視察団員氏名

3. 報告

<東南アジア班>

◇はじめに

◇東南アジア諸国援助活動視察

—インドネシアを中心として—

◇タイ国における日本の技術協力

◇フィリピンにおける JICA

活動を視察して

◇インドネシアを視察して

◇ASEAN 諸国研修視察に参加して

—マレーシアを中心に—

<中南米班>

◇移住地農業の現状

◇中南米の教育事情について

—日本人移住地内教育を中心に—

◇中南米における畜産事情

◇中南米における JICA の技術

協力を視察して

◇中南米のまとめ

広島県立大竹高等学校教頭

中 澤 清…………… 1

埼玉県立杉戸農業高等学校教諭

小 山 千 秋…………… 4

東京都立大森東高等学校教諭

柵 木 常 治…………… 14

山口県立防府商業高等学校教諭

佐 藤 哲 夫…………… 22

高知県立高知農業高等学校教諭

田 村 博 通…………… 27

愛知県立中川商業高等学校教諭

近 藤 哲…………… 30

長野県立北佐久農業高等学校教諭

木 内 秀 雄…………… 38

宮城県立多賀城高等学校教諭

千 葉 大 健…………… 45

佐賀県立佐賀農業高等学校教諭

堀 越 博…………… 57

京都府立農芸高等学校教諭

清 水 淳之助…………… 66

団長 木 内 秀 雄…………… 75

1. 視察日程

<東南アジア班>

研 修 地	期 間
東 京	7月25日(木)
マ ニ ラ	26日(金)～ 30日(火)
ジャカルタ	30日(火)～8月3日(土)
クアラルンプール	8月3日(土)～8月7日(水)
バンコック	7日(水)～ 11日(日)
東 京	11日(日)

<中南米班>

研 修 地	期 間
東 京	7月25日(木)
リ マ	27日(土)～ 30日(火)
サンタクルス	30日(火)～8月1日(木)
マ ナ ウ ス	8月1日(木)～ 3日(土)
サンパウロ	3日(土)～ 6日(火)
イ グ ア ス	6日(火)～ 8日(木)
アスンシオン	8日(木)～ 9日(金)
リオ・デ・ ジャネイロ	9日(金)～ 11日(日)
メ キ シ コ	11日(日)～ 13日(火)
東 京	14日(水)

2. 視察団員氏名

<東南アジア班>

[団長] 中 澤 清 広島県立 大竹高等学校教頭(地理)
 小 山 千 秋 埼玉県立 杉戸農業高等学校教諭(農業)
 柵 木 常 治 東京都立 大森東高等学校教諭(英語)
 佐 藤 哲 夫 山口県立 防府商業高等学校教諭(英語)
 田 村 博 通 高知県立 高知農業高等学校教諭(農業)

近 藤 哲 愛知県立 中川商業高等学校教諭（英語）

<中南米班>

〔団長〕 木 内 秀 雄 長野県立 北佐久農業高等学校教諭（農業）

千 葉 大 健 宮城県立 多賀城高等学校教諭（社会）

堀 越 博 佐賀県立 佐賀農業高等学校教諭（農業）

清 水 淳之助 京都府立 農芸高等学校教諭（農業）

◇ はじめに



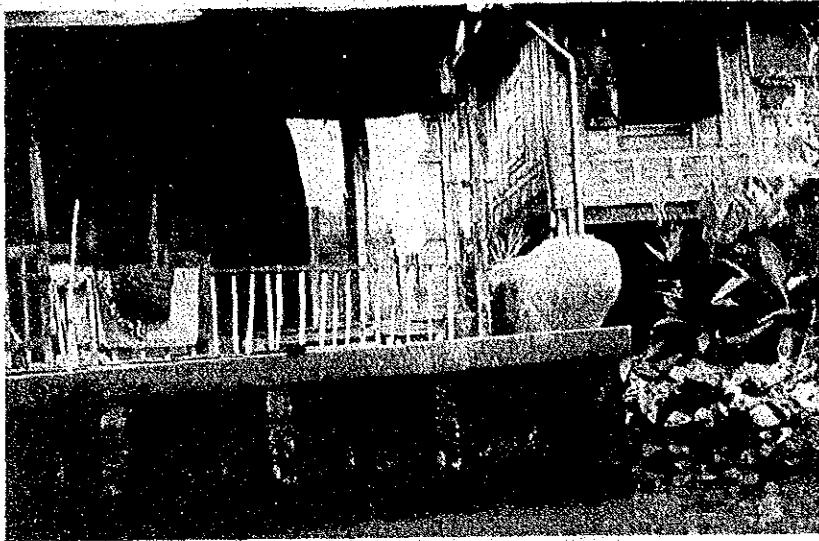
広島県立大竹高等学校教頭

中 澤 清

本論に入る前に地理の専門家の私にとって、特に心の惹かれた自然的・人文的景観について地理的描写を若干してみたいと思う。

バンコックには5日滞在したが、その間の1日をさいてチャオ・プラヤ川のトンブリの水上マーケットとワット・アルン（暁の寺）を見学した。タプラチャンの船着場からチャーターしたモーターボートに乗った。太陽は右上、船は川幅2キロほどの流れの、左岸に近い水域を上って行く。白い雲が美しい。水上生活者の船が点々と現れてくる。いずれも繁殖力の強いホテイアオイで周りを埋められている。「対岸は現在の首都バンコックの双子都市トンブリ（旧首都）であるが、ここはプラヤータークシン将軍がアユタヤからビルマ軍勢の包囲を脱出してトンブリ王朝を築いたが、一代で終り、1872年にタクシン王朝の将軍チャオプラヤーチャクリが現在のチャクリ王朝を興した。彼はプラブッタヨーッフアーチュラローク王（ラマ1世）となり、現在の首都バンコックを建立した。現在の国王プミポン・アデュラヤデート大王はチャクリ王朝の第9代目にあたる。」とJICAバンコック事務所の鈴木信一次長の説明があった。その史実の克明さと蘊蓄の深さに感嘆し敬服した次第である。写真はチャオ・プラヤ川周辺のクロンと呼ばれる運河が網の目のように発達しているところで、人々はクロンに沿って家を建て川辺に栈敷様のものが造られ、素焼の甕が必ず置かれている。これは天水を貯え飲料水にするということである。出発前JICAの桑原正男中国支部長（元・JICAバンコック所長）が、この甕をコツンとたたいてボウフラが沈んだ上澄みの水なら大丈夫飲めるといわれたが、チャオ・プラヤ川やクロンの水が薄茶色をしているのを眼前に見るとどうも飲む自信がなかった。しかしそこに住む人たちは灼熱のタイの自然の中に生き、日本人に似た顔と体恰好を持ったアジア人種南方系のアンナン族の彼等は、優しい心を持って素朴に生きているのが印象的だった。やがてワット・アルンをめざして再びクロンに進んでいく。朝日に輝くワット・アルンはまさにバンコックの象徴といえよう。

次にJICAインド
ネシア西ジャ
ワのセラ
ン
浅海養場プ
ロジェクト
吉光虎之助
チームリー
ダーの自宅
のきれいな
応接室に案内され、品のいい奥様



チャオ・ブラヤ川のクロンの水辺の家と水壩

が豊富な熱帯の果物を取り揃えて歓待して下さった。果物の王様ドリアン、女王のマンゴーそしてパイナップル、ジルクバリ、ジャンプー、モンキーバナナ等々。南緯6度の南十字星の輝く土地ならではの味わいであった。奥様の昌子夫人は旧制広島第一県女（現広島県立皆実高校）の出身と承り、たまたま私も昭和24年から35年まで11年間奉職した学校なのでその奇遇に一人なつかしく、県北の庄原市出身の吉光リーダーともども早速県人会となり、しばし故郷の話に花が咲いた。

それからラマダーン。1ヶ月間人々は日の出から日没まで断食する。年寄り、病人、妊婦や弱い女子供をのぞいて人々はいっせいに断食にはいる。真夜半の3時すぎにモスクからコーランが村中にひびき人々は日中水一滴とらず、どうやって彼らはやっていくのかと思うが、この時ばかりは村じゅう心をひとつにしてこれをきびしく実行する。こうして宿便がとれ、ふだん不衛生なものを食べている内臓がクリーニングされ、また心も村のオキテをまもってきた昔ながらの生き方に一層の決意で戻っていくのであろう。宗教と生活との密接な結びつきについて驚くとともに当国で生活する場合、少なくともイスラム教の知識と理解がないと種々トラブルのもとになると思った。

まず全日程を通じて私の最も強く感じたことはJICAの綿密周到な計画のもと、各地で事務所長さんはじめ職員の方々及び現地の皆さんより、温かい熱心なそして積極的・奉仕的なうまい言葉には表現できない大へんなお世話になり、予期以上の得難い見聞や体験をさせていただき、今後の国際理解、国際教育を進めて行くうえに大いに教育効果を高めていくことであろうと思った。

私は今回の研修から国民的関心の高まっている国際教育を二段階に分けて考えてみたいと思った。まずその第一段階は国際事情の研究、国際理解の教育であり、そしてその第二段階は国際協

力のための教育であると考える。

海外の地誌的・自然的事情を学び宗教、文化、政治、経済、産業、教育等の人文的事情を理解することによって、彼我両国の比較検討も可能であろう。相手国が強く求めているものは何か。そこに経済援助なり技術援助なり、さまざまな問題が浮かぶであろう。

若い技術者が開発途上国の求めに応じて、どしどし海外に進出することは、互いの信頼と友好のキズナを結び国際協力の聖なる使徒ではなからうか。

要は国際教育による第一段階の教育即ち国際理解の教育が十分になされてこそ、第二段階の実践即ち国際協力のための教育に移るべきで、これを把握することが、国際教育を推進する上で関係者の心すべき点であると思うし、それがまた国際教育を定着させ、発展させることにもつながるのである。

周知のごとく東南アジアの経済を生耳っているのは華僑であるが、今回はこのことをイヤというほど見せつけられた。彼等はその土地に永住し、国籍もとってその国の人になりきっているからうまくいくのだと思った。日本人は狭い島国から乳離れのできない“甘え”の中でこれまでの本社出世指向型でやたら目先の営業成績ばかりにハッスルしているとその国の市民感情までそこね“日本の出稼商法”と批判されかねないし、今後の日本に要請される国際化への対応もおぼつかないだろう。“永い信用”への礎として国際教育は是非必要なことではなからうか。この点今回の東南アジアのフィリピン、インドネシア、マレーシア、タイの国々でのJICAの信頼度は実に高く、各国で尊敬され、また青年海外協力隊員たちも強く逞しくさわやかに現地に深く融けこみ、しかも所定の任期を終えて更に延長を申し出て頑張っている姿を目のあたりにして本当に頼もしくもあり、また頭の下がる思いであった。

私は広い国際的視野と逞しい創造力をもった青少年の育成こそ、これからの教育の重要課題であり、「心のフロンティア」を開発していくことがまず根幹ではなからうかと強く感じている。そのためには国際協力は地域的にも多様化している今日協力する側の基調として奉仕の精神、または人間連帯の共存共栄の原点に立ちかえることが大切であり、国際協力の中に占める人間協力の重要性を認識すべきである。この意味において国際教育は正に人間教育である。教師は新しい時代に生きる高校生に使命感と生き甲斐を感じさせ、斯の道の教育に情熱を燃やし、海外に対する正しい知識と理解を深めさせ国際発展の気風を醸成し、日本人として主体制をもった国際社会に活躍できる人材を養成していくことが肝要ではなからうか。

21世紀はアジアの時代といわれる。おつきあいはまず近隣の国々からとASEAN諸国を实地に見聞させていただくことは本当に有意義であり有難いことであったと痛感するとともに、どことなく秋めいて涼風を肌を感じ、木の葉の舞い落ちる姿を見て、ここは日本だと改めて思う昨今である。

◇ 東南アジア諸国援助活動視察

—インドネシアを中心として—



埼玉県立杉戸農業高等学校教諭

小 山 千 秋

私は植物、造園の立場からインドネシアその他の国での出会について紹介したい。

1. 7月31日(水) Bogor の農業省、農業研究開発庁、中央食用作物研究所を訪問する。

古めかしい、スペイン風の建築が、周囲の古木と調和し、恰も日本の旧国立農業試験場のよ
うな外観である。

ここでは、1978年10月～1985年10月、更に2年間の延長を認められて、7月間の協力プロジェ
クトを実施中である。

(1) プロジェクトの概要

1970～1978、稲作を中心とする、食用作物の生産研究プロジェクトが、多大の成果を治めて
終了した。更に又、イスラム国民の蛋白源を大豆に求める国政の方針によって、「作付体系に
係る豆類研究強化プロジェクト」を発足し、1978～1983の5ヶ年と2年間のフォローアップが
今年終わろうとしているところである。

(2) プロジェクト対象の地域

インドネシア全域にある6食用作物研究所の指導と、Bogor の中央研究所で試験及栽培を
行なう。

(3) 主要協力目標

- 1) インドネシアの自然条件に適合した食用作物の栽培技術開発
- 2) 研究手法の伝達(技術移転)

(4) 主要協力内容

- 1) 豆類、他の畑作物の育種技術
- 2) 豆類、他の畑作物の栽培技術

- 3) 植物生理(作物栄養)
- 4) 植物病理(作物保護)
- 5) 昆虫(作物害虫防除)
- (5) カウンターパートの研修受入れ(38名)
(日本に派遣し、学問、技術を研究し、技術移転が可能にようにする)
- (6) 機械材の供与4億円(7年間)
- (7) 専門家の派遣(長期派遣専門家19名、短期派遣専門家32名)

泉山陽一氏をチームリーダーとして、現在は5名の専門家が、最後の協力活動を展開している。各研究室では、現在のカウンターパートが熱心に研究に取組み、日本機械にも馴れて研究の説明をしてくれた。

圃場には、各種作物が作られ、中でもキャッサバ(キク科)トウモロコシ等の生育が順調であった。

近年山地の焼畑面積が急増して、森林減少が激しく、世界的問題にもなっている。これは生活向上の資金を換金作物のキャッサバに求め、その栽培を殖やすためであると説明された。協力の内容は焼畑を小面積又は0にして生活の安定が計れるか、現地山岳民族の知識普及と技術指導が大変のようである。

2. Bogor Botanical garden を見学

ボゴール市は、首都ジャカルタから、南に45km高速道路を1時間で到達する。海拔290m、平均気温25.6℃、大統領別邸を中心とした大植物園の他、大学、研究所等の集中する研究学園都市で古くから外都市として栄えた所である。

1817年設立面積87ha 15,000種類の植物を有する世界唯一の熱帯植物園で、その旧名を *Buiten Zorg* 植物園といわれた。

園内には標本室、植物学研究室、動物博物館、自然保護研究所、海洋研究所等の研究施設等完備した世界的植物園である。園内は自動車を乗り入れ、要所を歩くようにして1時間はかかる。且ては、パラゴム、キナ、アブラヤシ、ダッタバルケア等の有用農業植物の導入試験を実施した所である。外国人研究者の宿舎も完備している。園の中心を南北にチリウン川が流れ、ほぼ平行に第1カナリウム通り、第2カナリウム通り、アストリッド通りが4分割している。通りには木の丈30~40mのカナリヤの木(ジャワアーモンドの木)の並木が、天を蔽って、訪れる人たちを秘境へ誘い込むような威圧感をもっている。

科毎に分類された高、中、低木は程よく植栽されて、170年の時代景観を醸し出している。ココヤシ、アブラヤシ、藤等が、植物園とは言え、自由に茂り、ヤシ園の風景を作っている。

更にこれらに寄生するラン科植物、タニワタリ、ピロウドカツラ等が一層自然感を深めている。

マメ科園では、まず目に入るのがカリン (*Pterocarpus indicus*) の大木である。日本のカリン (バラ科) とは科も形もちがう。紫檀、メルバラ (*In* *tosiabijuga*)



王様の木の板根

や、名前のわからない同科植物が沢山ある。

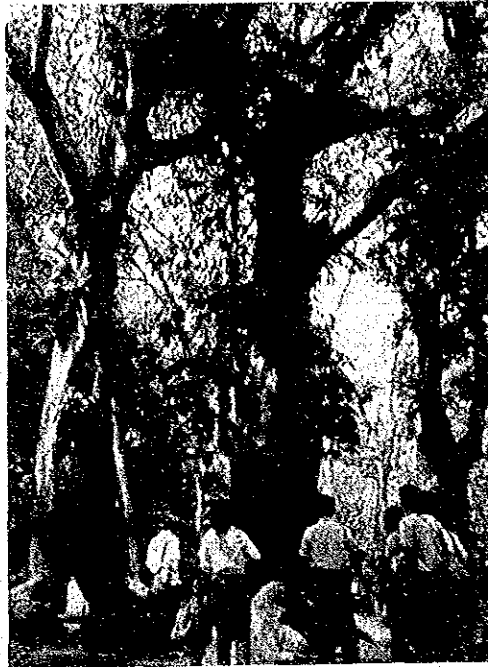
インドネシア農業研究プロジェクトの植物生理専門家の矢沢先生の案内で、王様の木が紹介された。話に聞いてはいたが、目の前に現れた巨大木とその板根をレンズに通したが、王様の偉容は1枚の写真には治まらない。170年前の植栽と聞いたが80余メートルの樹高と樹冠は、熱帯樹木の中で最も大きいとされている。板根は、木の倒伏を支える支柱の役割と、高温多雨により有機質の分解が早いので、流亡するのを防ぐ形態になっている。

近くの(まめ科)ヨウラクボク (*Amherstianobilis*) の垂れ下る赤花や、仏教の聖木、無憂樹の橙色の集合花が緑に映えて美しい。どこでも見られる *Bauhinia* の白い花も一きわ見事である。道の左側にセンダン科 *Aglaia* の林がある、白檀の木である。針葉樹では、ナンヨウ杉 (*Araucaria cunninghamii*) が樹形美しく林立しているが、古木は破形している。熱帯に少いカリビア松も見られた。ボルネオ鉄木といわれるクスの木科の *Eusideroxylon* (*zageri*) が赤黒い金属的？肌を見せていた。一転してヤシ科のゾーンに入る、約400種類も集められている。中でもピンロウジュ (*Areca catechu*)、ココヤシ (*Cocos nucifera*)、の幹は水上家屋の柱や橋組等に利用されている。アブラヤシは、有用な工芸作物として普及し、インドネシアの重要輸出産業の一端を担っている。ここに有名な東南アジアのアブラヤシ (*Elaeis guineensis*) の母樹があった。1848年、アフリカから導入された4本中の1本で貴重な存在である。後には、1本の幹からとれる澱粉で100人の兵士を養うことができると言われる。

サゴヤシ (*Metroxylon sagus*) が生い茂っていた。チウリン川の橋を渡り竹のゾーンに入る。南方の竹は叢生種で、地下茎がない。生活とのかかわりが深く、食用から、家庭用品、生

活用品に至るまで利用される。インドトゲタケ (*Bambusa arundinacea*) の密生したブッシュが点在する、トゲを持ちながら肌の美しいタイサンチク (*Bambusa vulgaris*) のキンシチは、日本のキンメイ竹に似ている。

キューバー産のカボックは、直径2mもあるか。インドワタの木 (*Ceiba pentandra* Var. *Caribaea*) は日本では鉢植えしか見られない。板根の発達と、着生植物の谷わたり、モンステラ、ピガクシダ等をはべらせて雄者の体を誇っている。これがカボックかと見なおすほど知る人ぞ知る世界一のカボックである。昔、飛行服のキルテングの中に、又、フトン、枕の中にこの果実の綿毛を利用したもの、ウコギ科 (ヤツデ、タラの木) の植物である。近くには、ヤツデアオギリ (*Sterculia foetida*) やドリアン (*Durio zibethinus*) 等見られた。遠くにタガヤサン等くすの木科の植物もみられた。第2カナリウム通りを過ぎて橋を渡ると、ピワモドキ (*Dillenia pndica*) が白い大花をつけていた。急に森林から抜け出て明るい芝生のパ



ラマに出た。極楽の池に、色とりどりのスイレン (*Nymphaea lotus*) が咲き、雄大な大鬼蓮や、バヒルスを取るカミカツリ (*Cyperus papyrus*) が待ちうけている。芝は正にチヂミグサである。大葉サルスベリ (*Lagerstroemia loudonii*) の花を見ながらアストリド通り (*Astrid avenue*) に入る。明るい通りで、中央分離帯にはカンナが咲いていた。後方にマクマオラ (*Casuarina* SP) の大木もみられた。左側バショウ科植物の中に、雄大に扇状葉を拡げる旅人の木が目をついた。 (*Ravenala madagas cariensis*) らん園に出る。交配らんと野生らんが分けられ、ミチコランと命名されたものもある。

車に乗り第2カナリウム通りへ出る、途中にインドボダイジュ (*Ficus religiosa*) を見た。葉の先端が長く尖ったゴムの木である。世界一軽い木のバルサ (*Ochroma lagopus*) の大木を見ながら、通りを下り吊り橋の所で下車すると、大木の並木が、トンネル状に道を蔽い、この木々を渡り伸びる巨大なツルト、無数に垂下るインドゴム (*Ficus elastica*) の気植が、夢のアーケードを形成している。見る人にもみ味わえる壮観さともいえよう。

白と黒の樹皮をもつ2本の木が隣合って、互に板根を重ね合っている。黒い木が、フィリピンで言うラワン、インドネシアでメランティと呼ぶ、フタバガキ科、*Shorea* 属メランティ・テンバガ (*Shorea leprosula*) である。専門家の話によれば、100年で径1 m位の大木になる熱帯多雨地帯の代表樹木である、日本への南洋材の主流である。フィリピンでは、合板加工したもののみ輸出している。

一方白い木はゴムの木である。ゴムは桑科に属するイチヂクの仲間で、実を割るとイチヂクと同じ構造である。ゴムは無数の気根を出し、空中の湿気からも水分を吸収している。

橋を渡り大統領別邸に向う。ムクロジ科やアカネ科の植物を左に見ながら、閉された門から写真だけ撮って戻る。この辺には香料のニクズク科 (*Myristicaceae*) のカカオの木 (*Theobromacacao*) があり、反対側にカキの木科の黒檀 (*Diospyros*) が数種ある (*D. pilippensis*) (*D. malabarica*) (*D. Microphylla*) *pilippensis* はシマコクタンは、大木になるが、ここでは現在低木状であった。

時間の都合で急いで引返すと、又ヤシ科の中に入る、大王ヤシ (*Roystonea regia*) とクジャクヤシ (*Caryota urens*) の雄大な並木を眺めながら裏門に向えば、ゾウ竹 (*Dendrocalamus giganteus*) を見る、径25cm、高さ30mの巨大竹である。ヤシの中をぬけて出口に向かう。ピロウヤシの中に黒い毛に覆われたサトウヤシ (*Arenga pinnata*) が茂っていた。

ロタン (藤) に出合った。ヤシ科とは信じられなかったが、ラベルを信ずるしかない。葉を見れば正にヤシである。*Plectocomia elongata* の巨大とうもある、細いものは幹が緑色で刺があり、葉をつけている。その先端はどこまで伸びているかわからない。

急にギャ、ギャという声に気付いた、大木クローネの枝に無数にぶらさがるオオコウモリである。高さ30メートルもあるので小さく見えるが、翅を拡げれば1 mはあるだろうとのこと。この園で、この場所、この木にしか止まらないのも面白い。これを最後に門を出た。

一生に一度は見たいと思っていた当植物園を見学できて何よりであった。私の植物に対する認識の度合いが変わり、これを機会に更に東南アジアの植物を研究し、園芸、造園に役立てたいと考えている。

3. プッチャン峠の茶畑と公園

植物園から車で1時間、海拔1,500mのプッチャン峠を登った。午後ともなると働く人影を見ない。遊ぶ子供と、茫然と通りを見ている人の多いこと。峠近くは全山開墾され、茶畑数千町歩にも及ぶ一大生産地が形成されている。熱帯の高冷地をお茶の産地としたことは面白い。峠から更に30分程の所に旧オランダ提督の館跡を公園として公開している。古木と芝生の一大庭園は、熱帯特有の寄生植物が繁茂し、カナリヤの木、ヤシ、南洋杉や草も自由に伸び伸びと

生育している。グラグラ坂は、オランダ風に敷石舗装され、歴史の跡を留めている。地球上最大のシダ、ヘゴ (Alsophila, spinulosa Tryon) は、八丈島を北限とするが、現在ほとんど輸入も絶えている。ここでは我世とばかりに 8 m の幹に 2 m もの羽状複葉を広げている。道端に、タニワタリ、カラテア、むらさきおもと、ヒロデンドローム、モンステラ等が植えられた物らしいが自然に茂り、谷まで埋めつくしている。ゴムの大木からお化けのように垂れ下る気根が道を塞いで、空も見えない程うつ蒼としている。稲妻が光り始めた。ふと前が開けたら、ゴルフ場である。きれいな芝生、その中に点在する樹木は、台風の試練もなく、光と、水と、温度に育まれ、個性のままに翁樹となっている。アロカリヤ (杉) カリアンドラ (ネム) に近づいて見ると、石こくやシダが着生している。雷鳴に追われて足早に引返す。この公園は、生物環境や生態系の観察までできる都市形の自然公園である。期待した自然の掘出し物も見ずに心惜しくジャカルタに引きかえした。

4. C E V E S T 見学

昭和56年1月鈴木前総理がASEAN諸国を歴訪した際、人造りプロジェクトの設立を提唱され、各国に40億円の無償資金協力及び技術協力プロジェクトが展開されている。

インドネシアに対しては、職業訓練指導員・小規模工業普及員養成センターを設立し、1984年建設開始、1985年機械搬入据え付け、インドネシア労働省及び工業省へ引渡し、8月開講式の予定である。

このプロジェクトは、労働省管下の職業訓練部門と、工業省管下の工業普及員養成部門とあり、日本の専門家が1983年～1988年の間、現地の指導者を養成し、同センターの運営を伝授している。大河原氏をチームリーダーとして、17名の専門家が次のように活躍されている。

職業訓練部門は訓練技法、技能検定、機械、溶接、板金と配管、自動車整備、電気、冷凍・空調、電子の各科、

工業部門では、研修、材料開発、調査分析、指導相談、下請企業の育成の各部門を担当して、カウンターパートの養成が軌道に乗り、今年9月に生徒を募集して、開講式を行なう由、鈴木前総理の出席を待つ所内には、活気と希望がみなぎっていた。

5. インドネシア灌漑排水施工技術センター

ジャカルタの郊外プカシ市に設立されたセンターは、農業の基本的条件を整備して食糧の増産と、灌漑技術者への技術移転を目的とし発足したものである。

協力の期間は1981～1986の5ケ年とし、無償援助15億円の規模である。これに携わる専門家6名、短期専門家29人、カウンターパート19人で研究活動を展開している。

活動内容は、

- (1) 灌漑排水事業のモニタリングシステム開発
- (2) 施工技術に関する情報サービスシステムの開発と運用
- (3) 施工、積算、施工管理の基準化
- (4) 業務の電算化
- (5) 施工材料、施工法の試験、調査
- (6) 施工技術者の研修

等であるが、活動はすっかり軌道に乗り、目的は達しているようである。当センターの試験施設は日本の高校農業土木科程度の内容をもち、当地としては最高の施設であり、大学生の実習にも利用されているそうである。

帰りに、灌漑施設の整備された、用水に添って走行中土手に妙なものを見た、1.5m位の苗木が竹籠に保護されてすくすく育っていた。竹の国ならではの植栽保護である。木を植え周囲

に6本の竹を

打ち込み、地

上1m位にし

て割竹を巻き

つけたもので

す。一体何か

から木を守るの

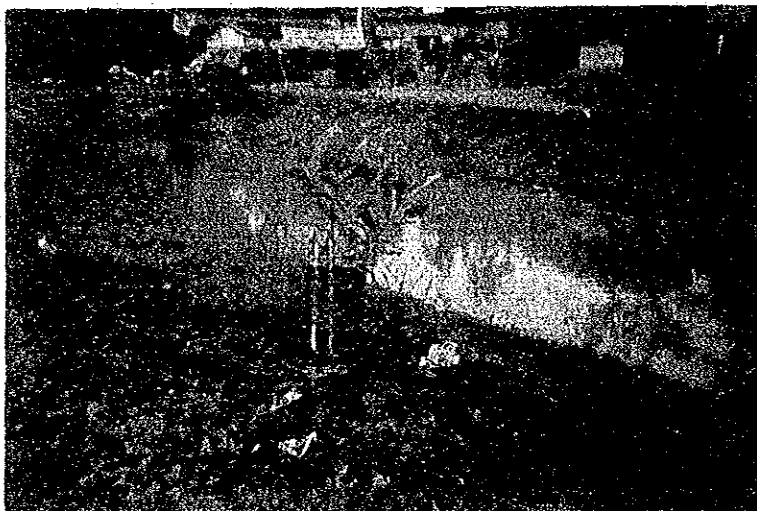
か、次の如く

考えた。風の

ない国だから

①放牧された

牛、山羊、②



③強烈な日光（日本では幹巻きをする）④雨期の増水による流失

この写真の一葉は、造園学上貴重な資料となることであろう。

6. ミニインドネシア見学

タマンのミニインドネシアを見学した。国内各地の生活文化を100haの公園に集めた歴史公園である。ジャワ、スマトラ、カリマンタン、セラウエシ、イリアンジャヤ等の民族文化を住生活や、寺院建築で紹介している。遊園地、ショッピング街もあり、一大観光施設として人々の集まる所である。バリ島のヒンズー寺院の門は、チャンデイ・バンクルーンと呼ばれ、左右に切り分けた構えが独特であった。イリアン・ジャヤの大家族の高床式住居に入ってみた。地域・宗教・環境により異なる様々な途上国の文化に接することができた。

7. セラン鉄道事情視察

JICA鉄道専門家田村氏の案内で、8月2日、薄暗いコタ駅に着いた。朝市も食堂むせるような人の群れ、夜明けの臭気が漂う中で、切符を購入する。17ルピア、200km余の料金が日本円で5円70銭、夢のような現実である。車内に入ると古い、暗い、きたない、我々を物珍らしく眺める乗客の表情は意外に明るく、声高らかに会話している。物売が行列して売り歩く。新聞、タバコ、果物、弁当、日用品、民芸品まで、コンペアー・マーケットとでも言えそうである。窓は茶色にくすんだプラスチックで、ほとんど開かない。4人向いの座席の上にあみ棚があるドイツ製の車輦である。発車時間になると、既に乗り込んでいた人達を車掌が追い出して私達に提供してくれた。特別客の扱いである。田村氏の説明によれば、オランダ植民地時代に敷設した鉄道で、スマトラとの流通を担う鉄道であった。やがて町の裏側が見える、「いよいよ始まりますよ」という合図と共に、線路の両側にスラムが見えて来た。鉄道用地に不法建築した幻の住宅街である。この国では、貧しい人は、恵みを受けるイスラムの教理により、切符を買わずに乗る人さえあり、屋根が只の席とされている。地方から出てきた労働者が、手軽に家を作り、一定の通勤圏を形成している。ベッドタウンである。何千人か何万人かの人たちはが都会に出稼ぎ、残りはこの地で商売している、この人には、炊事しない人、金がなくなれば働く人、立派な家族生活を営む人様々である。可愛い制服で学校に行く子供もいる。汽車の軌道を只一の生活広場として利用する様は野生の鳥が、電柱の上に、針金や棒切れまで使って巣作りをし、停電させるのと同じ様である。列車が来ると退き、過ると集る。花を並べ、果物を並べて商う人ささえある。枕木の間は、ローラーをかけたように踏み固められ、因に枕木はオランダ製の鉄板である。ジャカルタ市に向う対抗車と出会う、列車の屋根には人が群れ、窓には、荷物がぶら下り、デッキは人が一杯、そして車中は比較的すいている。「暑いからですよ」と専門家は説明してくれる。更に本鉄道の由来、経営上の分析、今後の問題、等についても話していただき、この現象が理解できた。

田園地帯に出れば、家畜の遊園地となる。鶏、やぎ、羊、牛等が遊び、よく草を食べるので、きれいに刈取ったようになっている。住民にとっては、最高の道路でもある。線路と斜面の肩部を自転車が走っている。日本人の感覚ではわからない生活習慣である。

8. 浅海養殖プロジェクト見学

ゾック島北部最西端のバンテン湾は、セランから40kmの所である。ここに浅海養殖プロジェクトの基地を設け、1978～1982年を第1次協定期間として、養殖の試験を実施した。山下正夫チームリーダー以下8名の専門家と16人の短期専門家、13人のカウンターパートのスタッフで、2億9,900万円の巨費を費して第2次試験も終了した。その内容は

- (1) アカメ、アイゴ、フエダイ・フエフキ、ハタ
- (2) 養成、病害防除
- (3) 親魚採取及養成
- (4) 種苗生産
- (5) 摂飼生態試験
- (6) 普及のための増産基礎試験

貝類養殖については5年間の諸研究と技術移転が終了した。現在1984～1986年と再延長の第3次協力が認められているだけに本事業の重要性とむづかしさが注目される。試験場から実験現場(海中いかた池)まで船で渡る。大小の試験魚を網の池に養殖して各種試験を行っている。

この地は辺地で、道路も未舗装、橋がこわれてマイクロバスも通れない、小型ジープに乗りかえての往復、又水道もなく、水は一切運搬している状態である、研究員の皆さんの御苦労も察せられる。牧牛の背に白鹭が止まり、水田の水溜りで童が水浴びをしている風景も、この地ならではの叙情であろう。昼食後、所長さん宅で、南国のフルーツパーラーを開いて下さった。Papaya、Mangosteen、Avocado、Durian、Water、Apple、Ranbitan、Pine Apple、Banana等、生まれて初めて口にする物がある。特にDurianは、果物の主とも言われるがその臭が独特で口にすれば、美味より豊味が素晴らしい。この他フィリピンで食味したCoc-onut、Carambola等合わせて10種類の果物と、大豆加工のテンペも食味し研修に味を添えていただいた。

9. インドネシア農業開発リモートセンシングプロジェクト見学

インドネシアは人口1億5千万人、しかもその60%が、ジャワ島、マドウラ島に集中している、従って開発もアンバランスに進み、食糧の安定確保と、国内移住が経済開発計画の課題となっている。リモートセンシングの技術を応用して、農業開発適地の選定技術を移転することを目的としている。1981～1985年の間7名の専門家と、24名の短期専門家により、18名のカウンセラーを養成するプロジェクトである。

案内された研究所はビルの地下室にあり、高度な電子機器を操作するため15℃の恒温を保っている。

ランドサットや航空機より収集された情報のアナログ、デジタル画像を解析してこれを図化する。最先端の技術を移転することである。

10. ジャカルタ日本人学校見学

インドネシアの最終日程となった。郊外の広々とした学校は夏休のため、出迎えてくれたのは、校長先生お一人であった。

昭和44年、生徒数11人、教頭2人で開校し47年現地に移転、現在小学生704人、中学生225人の規模で、年に90人位出入りがある。教員は30名である。生徒はスクールバスで通学している。

教育方針は、「自由に伸び伸びと」である。生徒の質が高いため、レベル保証も可能である。高校受験のため中学生になると帰国する人が多いとのことである。こちらの家庭生活は日本と違い、広い庭に広い家、メイド、運転手付き主婦は仕事をしない建前から、家庭教育の問題が学校に反映されているようである。

現地の学校とも交流を多くしているが、親同志の交流が全くない。すべては子供の作文集、「南十字」にと、一冊ずつ戴いた。

11. タイ国 ITVE、ポピット校に協力隊の活動

1871年創立の職業教育校で1975年、商業高校を併設した総合大学である。女性協力隊員2名が、日本語教師として活躍している。

教室に案内され授業参観、交歓、日本の歌合唱等楽しい一時であった。子供達は、先生に憧れ、日本に憧れて明るく勉強していた。若い協力隊員の素晴らしい活躍に敬意を払いながら同校を後にした。

12. 中央林業研究所

地球の緑、特に森林の減少が急激に進んでいる昨今、ランドサットは正確に捕え、数字で警告している。タイ国では年間10%の森林が、伐採又は焼畑により灰じんと化している。従って何を置いても、造林技術の開発が急務である。JICAにより、王室林野局の隣に、立派な研究所を設立し、1981～1986年、5ケ年のプロジェクトが推進されている。7名の専門家は、石川チームアドバイザーを中心として、10名のカウンターパートを指導しながら研究を続けている。試験場は300km離れた北東部山岳地、サケラートにあり実務試験を行っている。

この他、焼畑の無制限実施には、あらゆる手段をこらして説得に当り、増加傾向は、抑制できたと聞いている。

21世紀の地球を守る緑化プロジェクトは当アジア諸国だけでなく、地球全体で実施しなければならない。その意味でこのプロジェクトの果たす役割は大きく、重大な責務を担うようにも感じた。専門家の先生方の努力に敬意を表したい。

◇ タイ国における日本の技術協力



東京都立大森東高等学校教諭

榑 木 常 治

8月6日の新聞に載ると思っていた40年前の米軍の広島への原爆投下（昭20、8、6）の記事が、マレーシアの New Straits Times に載った。その新聞を肩カバンから出して目を通す精神的余裕ができたのは、飛行機がクアラルンプールの国際空港を離陸して水平飛行に入った頃のことであった。今回の視察旅行で4回目の面倒な出国手続を終えた安堵感から新聞をひろげる気になったのであろう。

Hiroshima recalls the horror of 1945という大見出しの下に焼野原の広島市をたった1人の身元不明の記者らしき人が見つめている写真、今年の8月6日の広島の様子（平和主義者による10分間の die-in の様子）をつたえる写真と記事、原爆投下決定に対する批判をしりぞけるレーガン米大統領の発言、BBCテレビのインタビューに答えての「日本中の人々がノーモア広島・ノーモア長崎を訴えている。広島への原爆投下の時、自分は広島近くの或る港にいた」などという日本の中曽根首相の発言などでうまった第10面を読んでいると、隣席のオーストリア人男性に話しかけられた。日本製品の氾濫する東南アジアを商用旅行中の彼は、機内の客席用ヘッドホーンに書かれた Made in Germany という虫めがねでなければ見えないような小さな文字を発見して、この事実を誇らしげに日本人らしい私に訴えたのである。私の心は、これによって、40年前（敗戦日本）から現在（経済大国日本）にひきもどされた。

空港で JICA バンコク事務所次長鈴木信一氏の出迎えを受け、これから4泊するアンバサダー・ホテルに向う団員は一様にくつろいでいるように見えた。

1. JICA 事務所でのオリエンテーション

8日午前には JICA バンコク事務所に招かれ、所長後藤教基氏と次長鈴木信一氏からタイ国における協力事業全般についての概説を聴く。……短期専門家の派遣は200～300名。青年海外協力隊員は現在37名派遣されている。その内訳は①保健婦、看護婦などの医療・教育分野、

②農業分野、③社会基盤整備分野、④工業化分野、などである。援助額は年間およそ1,000億円(技術協力70億円、無償資金協力130億円、円借款800億円)。わが国政府開発援助の7割がアジア地域にあてられ、残りの3割が中近東・アフリカ・中南米にあてられている。タイ国からの輸出はエビ、イカ、とうもろこし、骨なし鳥肉などが日本に、蘭の花や宝石をヨーロッパに、米やカン詰を近隣の国々に、布類を米国に対してなされている。しかし残念ながら品質管理に不十分なところがある。米はバンコクに近い地域だけでとれる。農村と都会との格差は大きく、農村の電化率は4割程度にすぎないが、停電は少ない。山岳地帯や高原地帯の土は赤土で質が悪いことや、人口増加率が低下していないことなどに問題がある。国王がいて立憲君主制である点は日本と似ている。公務員の給料は低い。小学校の収容力が低いので2部制のところもある。大学に関しては日本の共通一次テストのような全国统一テストがある。奨学金制度が発達していないので金持の子弟でないで大学に進学できない。従って一族のうちの出来のよい者を大学に入れて出世させ、その者にすがって生計を立てるといった傾向が見られる。留学先は米国、英国の順に高く、日本は4位か5位である。大卒公務員の初任給は2万5千円程度で、教員の平均給料は10万円程度である。日本との合弁事業が多く十合、大丸、阪急などのデパートがあり、ジャスコも近日開店する予定である。ひと昔前には日本商品不買運動が起ったが、現在においては対日感情はフィリピンほど悪くない。現在は1万人ほどの日本人がバンコクにいる。現大蔵大臣は日本に留学したことがある。

* タイ社会の階層構造は(中略)身分階層の側面からみれば階層は、支配、被支配の階層となり、富階層の側面からみれば国王を頂点として、官吏、軍人の上層、華僑からなる中間層、そして農民大衆からなる下層と三つの階層に分けられる。「新タイ事情タイ社会の論理」1981(田中忠治著)

2. I T V E ポピット校視察

JICA事務所でのオリエンテーションを終えて、早速バンコク市内の高校併設職業短大を

訪問し、日本からの青年海外協力隊員の1人である田島裕子先生の高校3年生対象の日本語の授業を見学した。指導事項の1つは「たり」の使い方であった。先生が「…したり～したりしている」の「…」と「～」の部分に入れる語句(例え



(左から中澤団長・小山団員・田島先生)

ば「新聞を読む」と「テレビを見る」)を板書すると生徒は動詞の形を変えて「お父さんは新

聞を読んだりテレビを見たりしている」という文を作るのであるが、生徒の反応は活発であり、実に礼儀正しい。タイ国の風習（高床式の農家に入るときは足を洗う）からきているのかも知れないが、「すみませんが、靴を脱いで下さい。有りがとうございます」という掲示物が壁にはられており、廊下に全員の生徒の靴が並んでいる。（生徒ははだしである）われわれも靴を脱がなければいけないのかと思ったら、教師や来客は靴をはいたままで教室に入ってよいのだという。これにはわれわれは感銘を受けた。授業時間が3分の2ほど過ぎたところで、田島先生は「今度は日本から来られた高校の先生方のお話をききましょう」と言って、参観者のわれわれを授業に参加させて下さった。われわれは約1分ずつゆっくりした日本語でスピーチをした。また地理の教師である中澤団長は早がきで日本地図を板書し、団員の住んでいる位置を指摘した。生徒はいろいろな質問を投げかけたが、筆者に対する質問は「バンコクのどこへ行きたいですか」や「東京の原宿について話をして下さい」といったものであった。なごやかに授業が終り、学校を立ち去ろうとしているところへ数人の生徒がやって来て、団員のうちの佐藤氏にサインを求めた情景は微笑ましかった。

3. 造林研究センター視察

日本からの7名の専門家が活動している Trade Training center の前を通過して、農業協同組合省王室林野局 (Royal Forest Department Ministry of Agriculture And Cooperatives) 内の造林研究センター (Central Forest Research Laboratory And Training Center) における日本からの専門家の活動状況の視察に向った。ここにおいては主として石川広隆専門家の説明をきいた。

造林研究センターは日本政府から王室林野局 (RFD) が受けた Grant Aid (無償援助) により設置されたものであり、日本政府の技術協力であるタイ国造林研究訓練計画と密接な関係がある。1979年に行われた要請の段階では、策定の不適當な理由から日本政府の援助が見送られ、1980年以來の再策定、日本政府との討議・折衝の結果、プロジェクトのタイトル変更 (「造林における機械化 (Mechanization in Reafforestation)」) → 「造林研究訓練計画 (Research and Training in Reafforestation)」) や1981年1月の鈴木善幸氏 (当時総理大臣) のタイ国訪問などがあって事態が好転し、1981年11月の JICA からの近藤茂氏一行のタイ国訪問などを経て、1982年6月24日に政府間の正式調印がなされ、1984年3月建物が完成し、同年5月に開所されるに至ったものである。

真新しい4階建のビルの一室で石川専門家の説明をきく。研究員は現在55名であるが、将来は100名を越えたいとのこと。本計画 (タイ国造林研究訓練計画) は1981年から1986年7月28日までを協力期間とし、組織は①プロジェクト事務所 (バンコク) と、②サケラート現地事務所 (ナコンラチャシマ県パクトンチャイ郡ホイナムケン村サケラート) から成り、日本人長期

専門家は石川広隆氏（チーフ・アドバイザー）、志賀忠夫氏（コーディネーター）、樋口国雄氏（森林生態）、石塚知裕氏（土壌）が中央造林研究訓練センターに、安藤宇一氏（現地リーダー・造林）、杉野洋二氏（育苗）、米倉昭三氏（機械）、岩佐正行氏（土壌）がサケラート・フィールド・ステーションに、合計8名が派遣されており、タイ側のカウンターパートは10名とのことであった。

このプロジェクトの背景としては、最近20年間における著しい経済発展と人口増加に伴い、主として焼畑移動耕作、^{*}開墾などが原因で森林の耕地化が進み、森林の面積が急激に減少しつつある事実がある。ベトナム戦争のため通路が増加し minority である山岳民族が国有林にまで無法に侵入して行う焼畑は山林の破壊につながっている。forest village の作成を政策的にすすめるためにはこのプロジェクトがきわめて重要である。造林の技術開発並びに不足する中堅技術者の養成確保を積極的にすすめるため、わが国に技術協力の要請がなされたものである。

* 焼畑耕作の技術というのは焼けてげた株だらけで、いくつかの大本がひときわ目だつ粗放的な畑をつくることである。（中略）その技術の基本的な特徴は、火つけによる開墾と、長期にわたり休閑地にすることである。（中略）村落が移動するにつれて、焼畑耕作はすべての土地を疲弊させた。

《 Jean Delvert : GEOGRAPHIE DE LASIE DU SUD-EAST (1967)
菊地一雅訳》

造林研究センターにおいては試植林造成（成長量試験、機械化試験、パイロット林造成、樹木園）、苗木生産、林道開設、訓練といったことを通しての大規模造林のための技術開発普及が行われているため、農業科教員である小山、田村団長の熱意は大変なものであった。彼等の熱意を無理やりおさえる形で、次の視察地に向った。

4. 労災リハビリテーションセンター (Industrial Rehabilitation Center) 視察

1961年にスタートしたタイの工業化（現在は第5次計画進行中）促進に伴い労働災害が増加した。（小学校4年終了程度や中卒程度での就職者が多いため、特に手肢のけがが多い）このことに対処するためにILOの協力によりマスタープランを作成し、日本政府に技術協力を要請した。その結果 JICA を通じての約10億円の無償協力（建物建設・機械供与）により IRC が作られ、日本からリーダー米川一充氏をはじめとした7名の専門家が派遣されて1984年2月から IRC プロジェクトが実施されている。

リーダー米川一充氏の説明・案内により、IRC の施設、業務を見学した。入所応募者はインタビュー、メンタルテスト、ハンドリングテストを受け、「ケース会議」「スクリーニング委員会（リハビリ専門家、ドクター、インストラクター等から成る）」の審査を経て入所を許可され、機能回復訓練（理学セラピー、作業セラピー）と並行して職業準備課程（機械15名、組

立15名、金工15名、木工15名、事務10名)を最長4カ月間受けて職場復帰・新規就職・自営などの道をたどるか、入所後直ちに、または職業準備課程終了後に、最長1カ月年の職業訓練課程(家電修理20名、洋裁10名)を経て職場復帰、新規就職、自営の道をたどる2つのルートがある。(ただし、彼らの受け入れ態勢には社会的に克服すべき問題が多い)施設の天井は高くして通風をよくしてある。寮生(IRCにはDormitoryが2つある)は食費、訓練材料費の負担の必要はない。また、「スクリーニング委員会」が認めた場合はリハビリの費用の負担もなくなる。

洋裁の日本人専門家(女性)は、大ざっぱでなくてきちんと型紙を使って裁縫する初歩的な技術からの指導法をカウンターパートに指導する事の多難を訴えていた。

一見気付かないが、訓練中の少女のズボンやそでの中は義肢であることを米川氏から耳うちされると、一たんは構えたカメラのシャッターボタンを押さずじまいになってしまう。歩行訓練のために、なだらかな起伏をつけ、ところどころ手すりがある庭を案内されながら、この協力事業の成功と発展を祈らざるを得なかった。

5. バンコクJICA事務所長主催夕食会

この夕食会においては、われわれ視察団員1人1人の東南アジアについての見解を所長に求められ、所長、次長および翌日バクチョン見学の案内をして下さる予定の稲留氏からわれわれの疑問に対する返答や、誤解に対する訂正や、今後の研究態度の持続のすすめなどがなされた。言わば、午前中に行われたオリエンテーションの延長とコンソリデーションと宿題の割当てといったものであった。

旅行とすれば17日間は短くはないが、東南アジアを理解するにはあまりにも短い期間であり、ひとつぶの砂を見て世界を判断するのに似た見かたで、それぞれの国の表面的なものめずらしさにとらわれすぎる欠陥を自覚しはじめているため団員の発言は7月の頃とくらべると低調になって来ているように思えた。(ただし、10数年前に「激動する東南アジアへの高校教師の旅」とかいうツアーで東南アジアを訪問したことがある佐藤哲夫団員の発言・質問はさすがに鋭いものがあつた。)誇大視しすぎた日本との相違点についてのチェックに並行して、タイ国と日本との友好関係の重要性、国際協力実施の面で日本が努力すべき点、更にくだけたスタイルで後藤所長の海外での生い立ちの話などを聞かせて頂いた。

* 「タイの場合円借款が700億円、無償資金協力が120億円、技術協力が70~80億円ということで援助国のトップであることは間違いありません。しかし、日本政府の援助による立派な病院や学校は、一体日本が作ったのか、タイが作ったのか、タイの一般の人々が果たして知っているのかどうか。一般の人たちに対するPRが今まで非常に欠けていたのではないかと、という反省があります。

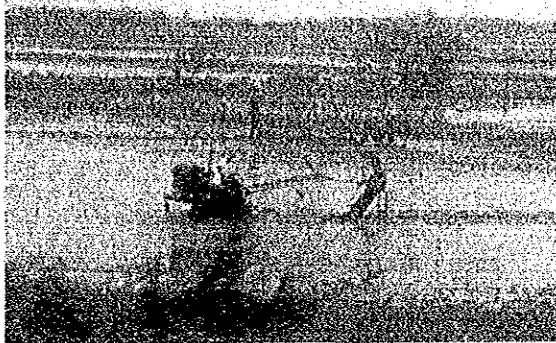
(中略)そこで評価の方はどうかということなのですが、早急に答えは出せないんじゃないかと私

は感じています。林業ですとリン・サイクルが50年であるとか、農業ですと10年ということがよく言われていますので、例えば5年のプロジェクトが終わったところで評価がどうだと言われても難しい面はあると思います。『在外機関長が語る援助の実情』の対談記事（「国際協力」1985年7月号）の中の後藤教基（バンコック JICA 事務所長の発言より）

いくら無償援助でも地元側はプロジェクトに対する必要経費を一部負担しなければならない。その国の財政事情に問題を投げかけることがある。例えば日本はタイのために病院や学校を造ったが、そのビルは日本並みに電気やガスが必要な設計になっている。設計通りに電気やガスを使うと地元にとっては非常にコストがかかる。このような燃料に対する予算が足りないので、設計通りに使えなくなる。また、日本の一流の設備が建てられても、壊れたり古くなった場合、修理や取替え予算が大きな問題となる。〈クレイトン・インクトライ「日本と東南アジアのあした」(1985年)〉

6. バクチョン口蹄疫センター視察

バンコクの北東170キロの Nong Sarai Rakchong にある口蹄疫センター（Foot and Mouth Disease Vaccine Production Center）に向った。王女の誕生日が間近であるため、バンコク市内のみならず途中の軍隊のキャンプなど様々な場所の門に王女の肖像を含む派手な



バクチョンへ行く途中のバスの窓から
見える農耕風景

飾りの取りつけ作業などを眺めながら約3時間の旅を続けた。見渡すかぎりの田園風景に子供時代へのノスタルジヤを感じたり、水あるところに咲いている蓮の花や水べりの木造家屋の作りなどに感動している私とはちがって、農業科教員の団員は農耕様式や日本から輸入された旧式の耕耘機などに関心を持っているようであった。

このセンターはタイ国農林省協同組合家畜開発局（Department of Livestock Development, Ministry of Agriculture and Cooperation）と JICA との間の技術協力事業によって開所したもので水牛、牛の FMD 予防ワクチン Type O、Type A、Type Asia-1、豚の FMD 予防ワクチン Type O を製造している。

もともとはフランケル法によるワクチン製造のための口蹄疫研究所（Foot and Mouth Disease Laboratory）が1960年に開設されたのであったが、フランケル法によるワクチン製造に必要な原料である牛の舌の上皮（bovine tongue epithelium）の不足により、タイ国の需要を満たせないため、1966年に stationary monolayer cell culture 法によるワクチン製造のための新研究所が開設された。1970年には養豚場での口蹄疫という問題に対処すべく拡張

され、その後タイ国から日本政府へのワクチン増産プロジェクトの援助の要請がなされて、約20億円の無償資金協力 (grant-in-aid) によって1978年に口蹄疫センターが完成し、同年2月にタイ政府に移管され、6月9日に開所式が行われた。日本の専門家団の派遣は1978年2月に行われた。(なお、FMD研究所の旧施設は診療、研究、ワクチンコントロール、特殊ケースの小規模ワクチン製造に転用されている)

所長は英語による説明(日本人専門家が通訳)をすませると、われわれ日本からの訪問者に出身地をたずねられ、ご自身が留学されたことのある日本の地名に耳を傾け、なつかしんでおられる様子だった。それからわれわれは白衣を着せられて、ワクチン製造室に案内された。日本にない疫病なので、参観者に菌が付着しないように細心の注意が払われているのである。(かつて米国にこの疫病が入ったことがあるが、大金を投じて撲滅したとのことである。すさまじい数の牛を焼却するので大金が必要なのである)多数の高価な器具やパイプでつながれているワクチン製造タンクのびっしり詰った部屋の見学を終えて、口蹄疫センターを後にした。

バンコクへの帰途、アユタヤに立寄り、山田長政ゆかりの日本人町跡や、アユタヤ王国の遺跡の見学をした。国際協力事業の活動状況の視察という重々しい仕事がすべて終り、土曜日である翌日は市内見学であるという時点で無事到達したという喜びと疲労がいっしょに湧き出した思いがした。

7. バンコク市内見学とタイ民族舞踊見学

バンコクJICA事務所次長の案内で、国立博物館、ワット・プラケオ、王宮、ワット・ポーなどを見学し、昼食後チャオ・ブラヤ川から舟に乗って運河に入り(時間的にはマーケットが賑わう時刻ではなかったが)水上マーケット地域を見学した。運河に面した家屋や、水と一体になっている生活状態などをつぶさに見ることができて有意義であった。時には水遊びをしている子供たちに手をふったところが、われわれのボートに乗り込まれて物乞いされるといった一幕もあった。途中一度上陸してワット・アルン(暁の寺)を見学がてら急角度の階段を手すりにしがみつきながら途中まで登り、また降りてきた時に全員あしがガクガクになっていたという不思議なアクシデントもあった。市内見学が終ると、ホテルの自室でシャワーなどでくつろいだ後、再び鈴木次長の出迎えを受けてインドラ・

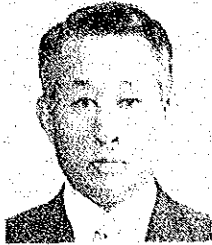


水上マーケット

リージェント・ホテルへ案内され、われわれの東南アジアの旅最後の夜の思い出に計画しておいて頂いた「サラ・タイ」での民族舞踊鑑賞つきの晩さん会が持たれた。

今回の研修旅行で得た知識と自分なりに形成した考えを、今後の国際理解教育の場で生かすとともに自分自身の国際理解を深める努力を続けたいと思っている。

◇ フィリピンにおける JICA 活動を視察して



山口県立防府商業高等学校教諭

佐藤 哲夫

マニラ事務所は日本大使館の二階にあった。現地人と日本人の職員が半数ずつ机を並べて仕事をしているように見えた。現地人の雇用促進の一面を垣間みた。坂田次長から、資料をもらった。「各国の国民総生産比較(1980)」に目を通すと、日本10,539、比国 345、米国26,391、ソ連12,120、西独 7,585、英国 4,769(単位:億ドル)をある。この国の GNP は日本の $\frac{3}{100}$! 空港出口にいた無数の人々、あれは失業者の群ではなかったのか、ゴミの散らばった凸凹道、トタン屋根の家が強裂に浮んできた。御手洗所長からこの国における JICA の活動状況の概要説明をうけた。83年度の経済協力は1億5千万ドルでわが国政府開発援助の6.3%を占め、中国、タイ、インドネシアに次いで第4位、83年度末までの累計実績も約4,800億円第4位、青年海外協力隊員は累計で639名にのぼり第1位、研修員受入累計数は3,231名に達することを知った。質問に対し所長は「日本の最先端をいく機材や優秀な人材がこの国に与えられています。この国の現在の水準からして、やゝもったいないと感ずることがありますが要請国の面子も立てなくてはなりません。」「短期専門家派遣というのは1~3ヶ月の滞在にすぎませんが、その間にそれ相当の仕事を残して帰っています。日本の学問水準はそれほど質が高く、多くの分野にわたって、この国の信頼を得ています。」「協力隊員の1割がこの国の女性と結婚しています。任期の延長を申し出る若者がたくさんいます。」と答えられた。この国に技術移転を行うために、本腰を入れての協力・援助が進行中である、という感じを強くもった。

1. TUP(フィリピン工科大学) IRTC(総合技術訓練センター)

IRTC プロジェクトのチーム・リーダー吉田重蔵先生は、「TUPをはじめとしてこの国の理科系・工業系の教育は、机上の学問、理論面には進んだ点が見られるが実験・実習面がひどくおろそかにされている。この国の人々の多くは、エンジニアは頭を使う者、テクニシャンは手足を使う者と区別して考えており、後者は軽蔑する風潮がある。また、この国の工業教育は既存

の器械・機材の保守・修理の能力開発に重点をおいて行われている。従って理論と実際の両面をかね具えた正しい意味の技術者の出現が、有識者の間で今日強く望まれている」と話された。ここでもらった資料には「JICA が担当する“技術者養成”を目的とするこのプロジェクトは、1982年～1987年の5年間をめどとして続けられる。このプロジェクトが行われる以前、IRTCにはすでに無償資金協力ベースで建物や教育機材が総額850万ドルほど供与されていた。ここには機械工学・電気電子工学・土木工学の三学科があり、現在、日本の専門家6人と比国のカウンターパート15人が学生の指導に当たっている。実習用の機材が完成した装置の使い方を教えるのに対し、実験用の機材は現象の本質を求めることに関与する。実験を行うことによって応用力に富んだ有望なエンジニアが生まれる。これが先進国の工業教育の姿である。5年間にわたるプロジェクトが終了した時、IRTCには大量の実験・実習設備がそろふことになる。また、日本のすぐれたエキスパートによって指導されたカウンターパートが育っていることにもなる。この仕事がかまくらければIRTCは本当に先進国並の実験・実習システムができる比国唯一の場所となる。しかし問題がある。それは、カウンターパートの人数および資金が不足していること。この2つの理由から、もし、完成しないままこのプロジェクトが終了することになれば、設備は残るかもしれないが、日本から来ているエキスパートは居なくなり、大量の設備も余り役に立たなくなる」と記してあった。

地図を見ると、日本が援助している国々はいずれも資源あるいは戦略面において、日本の生命を制する国ばかりである。何十億円にもものぼる供与機材が有効に活用されるよう、人材養成が中途半端に終了しないよう、また相手国から本当に感謝される形で援助を完了してほしいものと強く感じた。

途上国に共通している悩みは、頭脳流出である。日本の東工大に相当するTUPを卒業し、すぐれた技術を身につけた者の中には、アメリカに永住したり、別の企業に引き抜かれたり、役人としてまったく関係のないポストについたりする者があって困るという。「私達はこの国に技術者養成の目的をもってやってきて、一生懸命がんばっているのに、こうした現実に直面して大変悲しくなります」ともらされた。先程参観した授業で、愛国の志士 ホセ・リザールを扱っていたのが思い出されてきた。

余談になるが、日本では技術（工学）が科学（理学）と同等がそれ以上に見られ、技術者の社会的地位も高いといわれる。大学卒も理学の1.3万人に対し工学部7万人となっている。80年度のGNPが日本の $\frac{45}{100}$ である英国の場合、理学部の数は日本と同程度だが工学部の数は日本の約 $\frac{1}{2}$ 、この技術（工学）に対する姿勢の差が今日の両国の産業界の盛衰を決める一因となって

いる、という指摘がある。ところで、フィリピンの国土面積は日本の約0.8倍、人口は約0.5倍である。昭和58年における日本の大学の数は326、短大は526、計852。大正10年の数は、国立大15、私立大16で計31、となっている。この国で工学部をもっている国公立大学は TUP を含めて確か2校。私立大学は多いと聞くが、工業分野の充実を図るためには、理数科教育の振興と工業高校や職業訓練校の充実が急務ではないかと感じた。

2. ノーマルカレッジ図書館

教員養成大学の図書館は、まだ完成したばかりのものであった。日本の無償資金協力(13.7億円)で建設されたものである。机や図書など中味の充実は今からだという。廊下を歩きながら、案内してくれた人に、「今一番ほしいものを5つあげて下さい」と聞いてみた。①コンピューター②日本語の教師 ③印刷機 ④車、そして⑤日本に行って日本の教育の実態をつぶさに見てみたい、という答が返ってきた。信じがたいことだが、この国の小学校教師の月給は日本円にして1万円、大学教師にしても4万円とか、昇給など目下のところ無きに等しいというから、頭脳流出するのがうなづける。私達の滞在費は、ホテル代に食費を含めると1日でこの国の教師の1ヶ月分を費すことになる。安全な場所、安全な食事がこんなに高くつく国—これが途上国および欧米先進国の共通点である事を知るにつけ日本の役割の重大さを感じた。

3. 青年海外協力隊員との懇談

全隊員が年に一度受ける健康診断日と私達の訪問日がたまたま重なったため、夕食会で全隊員と懇談する機会を得た。志願の動機をきいてみると、「自分の力を海外で証明してみたかった」「管理会社がいやになったので挑戦してみた」という返事が多かった。

1985年5月1日現在の在比隊員数は98名(うち女性22名)。協力分野は機械の保守・操作が36.1%、農林・水産が33.0%、保健・衛生が16.5%、教育・スポーツが14.4%。近年、教壇型活動が増えつつあり、学校配属が57.1%。自分の専門を通じ、日比友好の尖兵あるいは草の根の外交官として活躍している。

最近、国際化という言葉をよく耳にする。「日本にとって国際化とは何か」を考えてみる時、私はその一つは、外国人と結婚することではないかと思う。「黒い髪、黒い目をした人間が、同一の言語を話しながらひしめき合って住んでいる日本という島国は、世界的に見た場合、きわめて例外的である。日本人に国際感覚が育ちにくいのはそのためだ」という人がいる。

国際結婚は宗教上の問題、その他さまざまな複雑な問題を含む大変やっかいなものであろうが、国際結婚する若者が増えるにつれて国際化とは何か、という問題も世界的なレベルで議論される

ようになってくると思われる。隊員に「言葉」の問題についてきいてみた。「1年もたつと、英語とタガログ語を使ってなんとかやりとりできるようになる」という。とかく役に立たないといわれる日本の英語教育も、まんざら捨てたものではないと安心した。使わなくては生きていけない環境にどっぷりつかればなんとかならぬはずはない。私達の周囲にいる米国人宣教師が2年もすると、かなり立派な日本語で説教するようになる。この事実は私にとって大きな衝撃であったが、この隊員たちと接してみて、これが少しやわらいだ。彼らに「日本の英語教育についての注文」をきいてみると「日本という国は、日本語で高等教育が行われている点が本当にすばらしい。また、現地人の人々と接して感じることは、彼等が大変おしゃべり好きだということ。娯楽施設に恵まれない人々が話に花を咲かせるのはごく自然のこと。従って、日本人も楽しくおしゃべりできる技術を身につける工夫が学校教育の中にとり入れられてよいのではないか」という感想が返ってきた。国際人になるための1つの条件は、「まず、自分の周囲にいる、どんな人とも気軽に、おしゃべりできるようになること」ではないかと思う。

4. RITM (熱帯医学研究所)

長期専門家として滞在中の金子義徳先生(東邦大、公衆衛生学、細菌学)から、「当研究所は、ワクチンの製造および広く熱帯に発生する伝染病の調査研究とこれにたずさわるマンパワーの養成を目的とし、JICAの無償資金協力のもと、17億5千万円の前算で建設されたこと、また、以降5年間にわたり、年間5千万円の機材供与、日本人専門家の派遣、カウンターパートの日本での研修が行われていること」などの話をきいた。

RITMは、個室10、4人病室10、計50床をもち、月・火・金の午後、外来診療を行い年間8千人の患者を診るといふ。1983年度の入院患者数は4,600名、貧乏と無知のためか、病院に来た時は、すでに手おくれという患者が多いとのこと。麻疹の後の肺炎で死亡する者や結核患者が多く、丁度30年前の日本の姿に似ている、また狂犬病で300人が入院したが全員助からなかったという話をされた。この国のベット数は人口1万人当り1706床、これは日本の劣だそうである。

この病院で蛍光抗体法による病原同定法の指導しておられる川島豊作専門家の話が私の興味をひいた。この国では220Vの電圧が突然250Vに変化したり、突然停電したりすること、顕微鏡の数が少ないことなど、ちょっと私達には信じがたい話を耳にした。途上国といわれる国々の実態が徐々に浮きぼりにされてくる感じがした。

5. PHRDC (フィリピン農村工業関連開発センター)

JICAの開発援助の一つに「アセアン人造りプロジェクト」がある。これは「国造りの基

礎は人造りにある、という基本的認識のもとにアセアン加盟国の各々に人造りのためのセンターを建設するもので、各国ナショナルセンターに対し、40億円をもって無償資金協力および技術協力を実施するもの」である。

この国のセンターは、4つのプログラムを担当しており、私達はその中の2つを視察することになった。プログラム1は、Human Resources Management を担当するもので、生涯大学の構内にあった。私達を迎えて下さったチーフの武井さんは一見現地人かと思われるほど、土地になじんでおられる感じがした。室内の壁は進行中の仕事が表示しており、説明も簡潔で気持ちよかった。JICA マークの入ったコンピュータや視聴覚機材に強く印象づけられた。残るのはこの国の発展に本当に役立つ人材の養成だと、ここでも強く感じた。

Cottage and Light Industries Technology Center。ここは PHRDC のプログラム4を担当している木工、竹、藤の技術者（指導者）の養成を行うところで、技術指導の実際場面を見ることができた。竹工技術家として日本で一級の腕前だといわれる八木沢さんは、実習場の機材を指さして、「ここは世界一の竹工場です。これほど各種の最新の機材をそろえたところは日本でも見つかりません」と誇らしげに話された。フィリピンは、豊富な木材、竹材、藤材を加工して外貨獲得の一助としている国である。この国にふさわしい援助であると実感した。

教育関係者・隊員を含めた夕食懇談会の席で私達は実に印象に残る言葉を聞いた。国際協力で大切なこと—それは—

1.に人間 2.に語学 3.,4.がなく5.に技術 というものであった。

最近、自前で外国旅行に出かける教師がふえてきた。山口県の場合、社会科を中心に案をねっている。しかし残念なことに観光旅行の域を出ない感みがある。私達が見せていただいたような場所が含まれると満足のいく旅行になるだろうし、JICA の広範な協力活動の実態を生徒に知らしめるのに大きく役立つのではないかと思う。

◇ インドネシアを視察して



高知県立高知農業高等学校

田村 博 通

1. インドネシア農業計画中央食用作物研究所について

このプロジェクトのできた背景は1970年より1978年にいたる間、中央農業研究所（現中央食用作物研究所）において、「食用作物に関する、日本・インドネシア共同計画」が稲で中心として主に作物保護の面から実施され、その成果はインドネシア側から高い評価を得た。このプロジェクト終了に先立ち、インドネシア共和国第3次国家経済開発5カ年計画に基づいて、畑作物、特に豆類の生産増強を図るための研究協力の要請があり、ここに本プロジェクトが発足することになった。

現在、多大の成果をおさめながら、新たな2カ年のフォローアップが進められている。

対象地域は、インドネシア全域、主要協力目標は、インドネシアにおける農業、気象条件に適合した食用作物の生産技術の開発、この研究手法の伝達、具体的には日本からの長期及び短期派遣専門家による共同研究の形で得られている。研究課題の中心は次のような項目があげられている。(1)豆類及び他の畑作物に関する育種技術。(2)豆類及び他の畑作物に関する栽培技術。(3)植物生理。(4)植物病理（作物病害防除）(5)昆虫（作物害虫防除）。これらの研究活動のほかに、農業研究に関する情報、標本、資料及び報告書の交換、インドネシア研究者の研究能力の開発、及び研究基盤の改善強化もまた重要な協力活動である。これらのために具体的実施内容として、カウンターパートの日本における研修、研究用資料、機械の供与等が行われている。研究目的にあった人の受入の大切さ、畑作物の栽培の歴史は浅い。豆類の単位面積当りの収量が低い、(1ha 当り0.08トン、アメリカ2～3トン)。これからは新しいプロジェクトの設立の必要性もでてきている。例えば土壌の改良、病害虫に対する対策等、根菜類ではキャサバ主要作物として栽培されている。大豆の利用方法は豆腐、テンペイ（納豆）、ケチャップ等である。

協力活動については眼に見えた形ではすぐにはあらわれないので、長期にわたる場合が多い。

2. アセアン人造りセンター職業訓練指導員、小規模工業普及員養成センター)

プロジェクトのできた背景は鈴木前総理が1981年1月 ASEAN 諸国を歴訪した際、ASEAN 各国に「人造りセンター」を設立し、これに対し、わが国が1億ドルの無償資金協力と技術協力を行う「ASEAN 人造りプロジェクト」提唱した。ASEAN 人造りプロジェクトは、国造りの基礎は人造りにあるとの基本的認識のもとに、ASEAN 加盟国にひとつずつ人造りのためのセンターを建設するものであり、各国ナショナルセンターに対し総40億円を以て無償資金協力及び技術協力を実施するものである。この施設においては機械、金属加工、自動車、電気系に分けられており指導員として必要な訓練がおこなわれている。また、小規模工業部門の中では普及員として必要な訓練・研修がコース別に分かれ実施されている。施設内には、各部門に高度な機械が導入されている(日本製)。

3. かんがい排水施工技術センター

このプロジェクトの目的はインドネシアにおけるかんがい排水事業の施工技術の向上を通じて事業の効率的遂行を促進し、食糧増産に寄与するため、施工技術センターを設置し、政府機関のかんがい技術者に対し、施工技術の知識と管理手法の技術移転を行うことである。屋外水理実験施設は、完備されており、大学生が実験にたびたび利用している。インドネシアにおけるかんがい施設の充実の必要性についても OHP を使用して説明を受けた。

4. 鉄道事情

タナハベン駅よりセララン駅まで約4時間、車内において鉄道専門家(田村氏)より協力内容について説明をうけた。鉄道分野における技術協力の開始は1972年である。そして1981年7月より以後専門家の派遣が継続されている。協力対象分野はインドネシア全域で、当面の目標は日本の開発協力プロジェクトの円滑な推進とインドネシア国鉄の技術の向上におかれている。そして将来の輸送体系、運営のあり方等に対する指導助言を行っている。又現在は線路の交換の時期にきている山。丁度通勤列車に乗ったせいか非常に混雑しており、特に対向してくる列車には危険を感じるほどの混雑ぶりであり、輸送体系の改善の必要性を感じた。

5. 浅海養殖プロジェクト

養殖場ではアカメ、アイゴ類、フエダイ、フエフキ類、ハタ類等が飼育されており、それらの魚の親魚養成一採卵一仔種魚飼育の種苗生産体系を確立させ、その知見と技術を確実にカウンターパートに伝達する目標でこのプロジェクトが行われている。将来国民の動物性たんぱく質の確保と零細農民の雇傭の増大を意図して、我が国への協力の要請してきたものである。

6. 農業開発リモートセンシング計画(人工衛星利用)

リモートセンシングの技術の移転を目的として、ランドサットや航空機より収集された資料の画像解析を行い、農業開発のための適地の選定、移住地の選定を行うプロジェクトである。

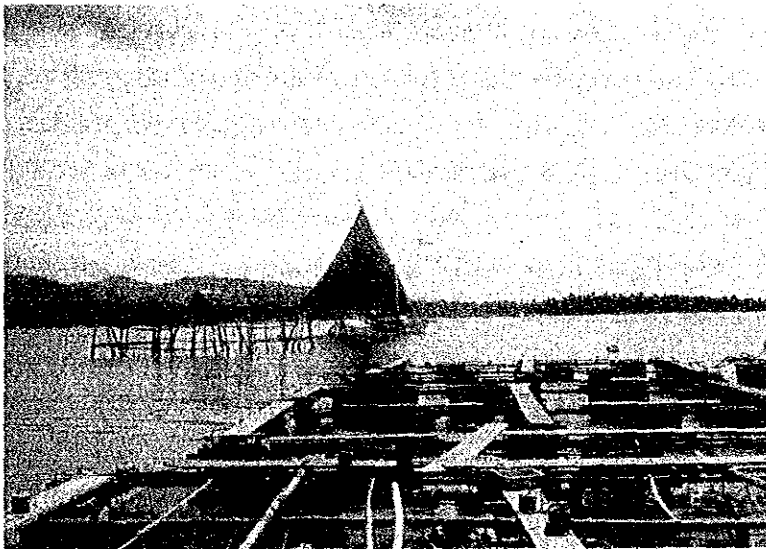
7. 日本人学校

昭和59年10月29日校舎が被爆をうけたがインドネシア側からの保障は全くなかった。転出、転入で生徒数に変動がある。進路に対する日本における受入体制を確立してほしい。教育レベルは低くない。通学バス22台を利用している等校長から説明があった。

8. 本研修視察において感じたこと

第1に青年海外協力隊員が熱心に仕事に精進していることと、明るく物おじしないで行動していること。第2に日本の企業の進出がめざましいこと。車や電気製品にしても五割以上は日本製、輸出、輸入の問題もあるが、フィリピン、インドネシア、マレーシア、タイでは日本の援助がなければ発展がないようである。第3に現地の人々が明るいこと。第4に自分が英語に弱く困ったこと。第5に反日感情は余りなく、日本の国を高く評価していること。同時に日本語にも人気が出てくるような感じをうけた。第6に JICA 事務所ではローカルスタッフと共に仕事をしており活気があった。

その他たくさんの勉強をさせていただきましたことを深く感謝し、親切さに甘えたことを反省しながら JICA の今後の発展を心から祈願いたします。



浅 海 養 殖 場

◇ ASEAN 諸国研修視察に参加して
(マレーシアを中心に)



愛知県立中川商業高等学校教諭

近 藤 哲

1 はじめに

戦後生まれの我々若者にとって、「外国人」、「外国映画」、「外国旅行」、「外国文学」等、外国という言葉から受けるイメージは決まって欧米諸国であり、とりわけ最近の傾向としては、外国＝アメリカという印象が強くなってきていると言っても過言では無いだろう。

毎日の新聞等で報道される外国のニュース、音楽などの記事はことごとくアメリカに偏っている。JICA の出版物である『国際協力』1985年5月号の特集記事の中で、朝日新聞論説委員の鈴木沙雄氏は調査結果として次のように書いている。「日本の新聞で米国の記事は、国際ニュースの面積で46%、記事本数で44.1%を占める……」と。この数字からも日本、日本人のアメリカ寄りがうかがえる。

さて、日本は先進諸国の一員として、現在、政治・経済に大きな影響力を発揮しているが、当然のことながら、欧米諸国の一部ではなく、アジア諸国の一員である。その日本が現在の繁栄に甘んじて、このことを忘れることのないようにしたいものである。前途の『国際協力』の記事の中に、「ASEAN 諸国の新聞は、日本の新聞が ASEAN 諸国のことをとりあげるのと比べると、平均して、記事面積では14倍、記事本数では10.5倍、日本のことをとりあげている。」と書いてある。戦後アメリカに追いつけ、追いつくと努力し、その成果が上がった今、日本という国の今後の立場をよく考え、アジアの安定、延いては世界の平和を考える時期にきているのではないかと思う。

今回 ASEAN 諸国訪問の機会を得て、私自身、アジアについての考え方を新たにし、実り多い研修を期待し参加しましたが、その研修成果として、以下に研修報告および訪問国の印象等を、マレーシアを中心に述べることにする。

2. 研修報告

マレーシア視察における研修日程

8月3日(土)	午後 8時クアラルンプール着 宿泊ホテルにて早稲田大学菊池教授と飲談
8月4日(日)	終日自由行動
8月5日(月)	午前 JICA 事務所訪問 午後 モントフォートボーイズタウン訪問
8月6日(火)	午前 国立計量研究所訪問 午後 CIAST (職業訓練指導員・上級技能訓練センター) 訪問
8月7日(水)	午後 3時5分クアラルンプール発

(1) 菊池教授との飲談

私達がマレーシアで宿泊したホテルに、偶然早稲田大学で社会学、文化人類学の研究をされている菊池先生も泊まられていたため、特別の取りはからいをしていただき、わずかな時間であったが、親しくお話をうかがう機会に恵まれた。先生は専門の関係で東南アジア諸国へはよくお見えになり、多くの知人もあり、学術会議等へもたびたび参加されているとのこと。私達もフィリピン、インドネシアの研修を終えた後でもあり、先生とは話し合いにも花が咲き、有意義な時間を持つことができた。話の内容をすべて書くことは出来ないが、特に印象に残ったことをあげる。

1) 文化人類学の分野では日本は非常に遅れているとのこと。単一民族であり、その必要性がないこともあるが、国際化がさげばれている現在、世界各民族の特徴などを研究し、国際理解、国際協力の基礎を作る必要性を強調されていた。特に ASEAN 諸国の文化人類学の権威者達は、日本人と同じ人種であるアジア人の研究に力を入れていない日本に対し強い不満を表していると共に、日本がこの分野での研究を進め、アジア諸国のリーダーシップをとって、アジアの繁栄と平和を実現させていくことを強く望んでいるとのこと。

2) 日本人はよく自分達をホモジニアスであると錯覚しているが、実は、各地方での文化・伝統等大きな違いがあり、実際はヘテロジニアスであるとのこと。その意味で国際協調の

みならず国内政治などでも、日本人についての人類学的研究が必要であると強調されていた。この御意見は、私にとってはとても印象的なものであった。

- 3) 外交的な立場からは、日本の政治家が、諸外国、特に東南アジアについて無知な面が多い。政治にたずさわる人、特に外務に関係される人は、もっとよく東南アジアの現状を勉強していただき、各国訪問および国際会議等参加に際し、予備知識を充分持っていただきたいとのこと。

(2) JICA 事務所訪問

視察研修を前に JICA クアラルンプール事務所を訪問し、中村所長および鈴木所員より説明をいただいた。

1) JICA の対マレーシア援助

中村所長からは『対マレーシア JICA ベース技術協力の概況』という 19 ページにわたる詳細な冊子をいただき、マレーシア全般にわたる JICA 協力の概要を説明していただいた。その中で主なものをあげれば、日本の二国間政府開発援助ではマレーシアは全体の 3.8% で、援助供与先国中では第 8 位となっていて、そのうち JICA ベース技術協力実績では 1983 年度では第 4 位である。1 位から 3 位までは今回私達が訪問したインドネシア、タイ、フィリピンであり、このことから ASEAN 諸国の中では比較的恵まれた立場にあると言えよう。マレーシアは国民一人あたりの GNP が、アジアでは日本、シンガポールについて第 3 位（2 位のシンガポールの約 3 分の 1 ではあるが）であるとの説明であった。第 3 位は一般的に韓国ではないかと思われるが、国民総生産の上では韓国の方が多いが、マレーシアの人口が 1500 万人弱ということでこの結果がでていたとのこと。しかし、いわゆる第 1 次産品（石油、天然ガス、木材、パームオイル、錫、ゴム、銅）などの輸出によるものが GNP の 50% 近くも占めているため、国際市況の影響が大きく、マレーシア経済の実質成長率は伸びなやんでおり、今後国内の工業化、近代化を計っていく方針である。とはいっても、マレーシア側からみた 2 国間ベース援助額の 70% 以上が日本からのものであり、マレーシアにとっても、日本と友好関係を維持することが非常に重要になっている。

2) 東方政策

最近までマレーシアは、手本とするのはイギリス一辺倒という考え方であったが、それを変え、アジアにおける先進国（日本あるいは韓国）を中心にまねをしていこうという政策が打ち出された。この政策を東方政策（Look East Policy）という。この一環として 1982 年以來、わが国は産業技術研修生を、1000 人以上を受け入れており、今後もこの協力は続いていくであろう。日本からは単に技術だけでなく、労働倫理（ワーク・エシックス）を学ぶ

ということも言っているが、本来マレーシア人（特にマレー人）は、のんびり型の人間であり、どこまで日本の技術、労働倫理が反映されるかという問題点も残っている。

3) マレー人最優先政策（プミプトラ政策）

現在のマハティール首相が、1970年に出版した「マレージレンマ」という本で、1969年5月13日の人種暴動の原因を追及しながら、マレー人が遺伝的に他民族より劣っていると説き（原因の一つに閉鎖的社会における近親婚の割合が高いことをあげている）、そのマレー人のために、政治、経済、教育などの面で他民族（特に中国人、インド人）に優先して、マレー人を保護しなければならないと打ち出した。これがマレー人最優先政策である。その中には、マレー語を公用語として、マレー語による国語の統一を計ったり、政府機関への職員採用においてマレー人を優先したり、又大学への入学選抜などでも、成績順にすれば上位は中国人ばかりになってしまうので、人口比で入学許可をするというような政策などがある。

4) 青年海外協力隊

協力隊は今年で20周年を迎えるが、マレーシアは初年度から派遣した国の一つでもあり、現在95名の隊員が活躍している。内訳は、男性54名、女性41名であり、他の国に比較して女性が多いのに気づく。これはマレーシアの治安が良いことが理由の一つであろう。特徴的なことは、農業面での協力が多くは当然であるが、それ以上に教育文化面での協力の割合が現在37.9%と非常に高いことがあげられる。その中でも、幼稚園教諭の派遣が22名もあり、マレーシアにおける教育関係の力の入れようがうかがえる。又、前述の東方政策の一つとして、学校教育において、第一外国語は英語としながらも、第二外国語には、日本語、アラビア語、フランス語をもうけ、日本語教育に熱を入れていることも事実である。現在日本語教師として7名の隊員が活躍している。マレーシアはマレー半島部の西マレーシアとカリマンタン（ボルネオ）島のサバ州、サラワク州の東マレーシアの二つの地域に分かれているが、将来的な協力隊の活動としては、西マレーシアでは教育文化関係が中心になり、東マレーシアでは第一次産業で隊員数が増加するとの見込みである。

(3) モントフォートボーイズタウン訪問

クアラルンプールから車で1時間位の所にある職業訓練学校のモントフォートボーイズタウンを訪問し、青年海外協力隊員として活躍している片桐秀貴氏に会った。この学校は200年前にカナダの援助で設立されたもので、当初から恵まれない子供達のために援助を続けている。現在はマレー人最優先政策の結果貧しい生活をしている中国人、インド人（主に母子家庭、父子家庭、または両親のいない子供）だけを入学させていて、生徒数は250人であり、生徒の年齢は17歳から20歳位までである。訓練内容としては、自動車整備、印刷技術、工作機械などであり、片桐隊員は自動車整備面で、ただ一人の日本人教師として汗を流している。基本的には

自給自足（校内で整備した一般の車の代金、印刷物の収入など）で学校運営をしているが、赤字面は援助で補っている。

(4) 国立計量研究所訪問

マレーシアの産業は前述のように、石油、錫、木材、水産品等の一次産品の輸出が主であり、将来の展望として工業の近代化が望まれている。1971年以来新経済政策を打ちたて、国内産業の育成に努力しているが、米年度から1990年までは最終的な第五次計画を実施する予定である。しかし、現在の状況では、外国製品に太刀打ちできる技術もなく、又国際規格に準じた製品を作る計量の機械、技術も遅れているため、1981年から日本のプロジェクト方式技術協力（4年計画）で国立計量研究所が開設された。機械、機材などは日本の無償供与であるが、建物はマレーシアの資金で建てられた。しかし、計量研究に対する理解が薄く、必要性を十分に理解してもらうには、10年以上の時間が必要であると研究所の専門家の方は言っていた。又日本から最新式の機械を導入しても、建物および空気清浄、冷房設備等が不完全な為、例えば、日本で1000万分の1の正確さで計測できる機械であっても、マレーシアでは100万分の1程度の計測しかできないという問題点も指摘されていた。

(5) CIIAST（職業訓練指導員、上級技能訓練センター）訪問

鈴木善幸前首相がASEAM諸国を歴訪して提唱された「ASEAMひとづくりへの協力」構想に呼応して、他のASEAM諸国に先がけてマレーシアが提案したのがこのCIIAST計画であり、始動しはじめたのもマレーシアが一番であった。

前述のようにマレーシア1971年以来New Economic Policy（新経済政策）のもとに経済の高成長を背景としての貧困の根絶と社会の再編成の実現を目指しており、その目標達成には、技能労働者の育成が必要である。それを担う各種訓練施設の頂点にCIIASTが位置づけられている。

このCIIASTプロジェクトに対する日本側の援助は、

- 1) 建物建設（22億円）
- 2) 機械設備供与（13億円）
- 3) 鋳造から機械、電子さらに監督技法まで7科14部門の専門家を派遣
- 4) 相手方指導員（カウンターパート）を日本に受け入れて研究を行う

など、多方面にわたって行われている。協力期間は1987年8月までの5年間とされ、その後マレーシア側だけでさらにこれを運営発展させていく計画である。

このセンターの内容を簡単に言えば、日本から派遣された専門家が、マレーシアにおける職業訓練学校などの教師を再教育し、技術、知識をつけさせ、その教師達が自分達の学校にもどり、その知識、技術を自分達の生徒に教え伝えていくというシステムである。一言でいえば、

マレーシア工業化の担い手となるマンパワー (man power) の育成機関であり、マレーシア側から大きな期待を受けている。実際に、マレーシアでは3年前に2校しかなかった職業訓練校を5年間で10校に増やす計画を実施中である。

3. マレーシアの印象

クアラルンプール国際空港に初めて降り立ち、税関を通り、迎えの車を待っている時、ふと心の安らぎを覚えた。フィリピン、インドネシアにおいてやや緊張の連続であった私達にとって、日本の空港に立っているかのような錯覚におちいったほどであった。この空港はクアラルンプールから車で30~40分位の所に位置し、成田空港と同じ働きをしている新しい空港であった。フィリピンなどでは空港内でも盗難などに細心の注意を払わざるを得なかったが、空港内の雑踏もなく、整然とした雰囲気であった。

空港から宿泊のホテルに向かう途中でも、整備された道路、車線通り走る車、立ち並ぶ高層ビルのあかり (夜の8時ごろであった)、加えて車が左側通行であり、まるで東京の街並をドライブしている感覚であった。さらにホテルに到着し、その日の日程終了後、治安は良いとの JICA 所員の説明に安心し、今回の旅行で初めて夜の散歩に町へ出掛けて行く事が出来た。私はベアーを組んで小山氏と共に中国人の経営する屋外のビアガーデン風レストランに立ち寄り、夜空の下、ビールをかわすことができた。

翌日は終日山行動の機会を得、クアラルンプール市内および近郊の観光にあてることができた。ほとんどの観光地が新しく美しいものであったが、その反面文化というものに触れることが出来なかった。出来ないというよりも、町があまりに新しすぎて、少し言い過ぎかも知れないが、文化が存在しないと云った方が良いのかも知れない。

たった4~5日の滞在で一国の印象をまとめることは無理なことであるが、クアラルンプールについての印象を少し書いてみよう。

一言でいって、日本の明治維新以来の100年間の混在している町である。大都会クアラルンプールは、高層ビルの隣立する超近代的な都市であり、南国の情緒はさほど感じることは出来なかったが、随所に見うけられるモスク (イスラム教の寺院) は、異国の雰囲気をかもしだしていた。

街を歩く人並みは、マレー人、インド人、中国人、あるいは西洋人と移民族であり、その衣装などを眺めるだけで、楽しいものであった。今回訪れた他の3か国では、町中の交差点で止まっている車に、新聞、雑誌、煙草などの物売りがむらがあったが、このクアラルンプールだけは、全く見うけられなかった。しかし、高層ビルの建築現場近くでは、日雇いの人々が自転車、バイクなどによる移動式屋台食道や、バラック風の軽食堂で非常に安い昼食などをとっている風景にも出会い、やはり、貧富の差というもの的一端をかいまみることが出来た。郊外の工業地帯では、

新築のアパート群が立ち並び、入居者を待っていた。又、マレーシアだけに限らないが、道路を走る日本車の多さにはびっくりさせられたものだった。さらにもう一つ、東南アジアでは初めて「プラトン・サガ」という名前の国産第一号車が完成したとのことであった。

長い植民地時代を終え、自立してまだ新しい国マレーシアである。先進諸国に追いついて、その文化、文明を吸収しようとしている段階であり、その顕著な結果が、近代的大都市クアラルンプールである。

戦後日本がアメリカに追い付け、追い越せとやっきになり、うさぎ小屋のエコノミックアニマルと言われながらも、努力の結果、先進諸国の一員となっている。現在のマレーシアは、日本が通った道を繰り返そうという方針であり、その現れが、東方政策である。今日、石油等による輸出で外貨を獲得し、生活水準は上がってきており、政情も安定しているようであった。しかし以下に述べるように、いくつかの問題点もあり、マレーシアが全く日本、韓国と同じように発展していくかどうかは、現段階では判断できないであろう。

しかし、今回の4か国訪問を終えて、各国の印象を比較すると、政治、経済的な見地から、今後発展していく可能性は、やはりマレーシアが一番大きいと思われる。

4. マレーシアの問題点

マレーシアにおける問題点は、一言で人種問題である。国民の54.5%がマレー人、34.5%が中国人、他の10%がインド人および他の人種であり、この混合民族をいかに統一し、政治、経済を安定させていくかが悩みの種である。特に現在のマハティール首相はマレー人最優先政策をとっており、マレー語による国語統一、国家統一を計るとともに、新経済政策による貧困の根絶を打ち出しているが、どの程度実績が上がるかが、今後の課題になろう。また、人種問題=宗教問題であり、マレー人はイスラム教、中国人は仏教、インド人はヒンズー教と一國に多宗教が混在し、また特にイスラム教は他宗教との融合を認めない宗教であり、今後この問題も長く続くことが予想される。

さらに階級社会の問題もある。ここで言う階級は、いわゆる学歴階級である。教育熱の高いマレーシアではあるが、大学卒は10%程度であり、その人達が社会において実権を握っている。給料面においても、当然学歴による差が明白に出ているとのことである。

もう一つ、珍しい問題であるが、現在マレーシアでは、人口増加計画が打ち出されているという。開発途上国では例のないことであるが、現在の国民の平均年齢が35歳位と低く、労働力増強という意味での計画ではあろうが、実際に人口が増えた時の問題はないのだろうかと疑問も残るものである。

また、西マレーシアと東マレーシア、あるいは都市と地方の貧富の差の是正も今後の重要な課

題となろう。この問題解決の一つとして、JICA 60年度実施予定の開発調査の一つに、鉄道整備計画（東西新線建設）があり、半島マレーシアの東海岸の若い労働力を西海岸に移し、またさらに、東海岸における近代化を計ること等、東西の総合的發展を考えているようである。

5. おわりに

今回の ASEAN 4 か国視察研修に参加し、国内では想像だに出来なかった JICA の事業内容を見ることが出来、新しい視点で東南アジアを見る目を養うことが出来た。この研修で体験した中で、私個人として感じたことを述べ、この報告書をまとめたいと思う。

南北問題がクローズアップされて久しく、先進諸国が開発途上国に対し、2 国間あるいは、国連などの機関を通して、援助を進めていることは、我々日本人にもよく知られていることであり、又最近ではアフリカ救済が一つのブームのようなものになり、民間放送局などで一大チャリティーキャンペーンなども実施されている。しかし、国際協力事業団、あるいは JICA という名称を聞いて、即座にその活動内容等を答えられる日本人がどれほどいるであろうか。いわゆる営利団体ではない JICA であり、広報活動も国内においてさほど重要でないかも知れない。しかし、日本人の安全、平和を守る上、防衛という立場と同じく、又それ以上に国際協力、国際協調の重要性が増し、特に東南アジアにおける日本の立場を良く理解させることが必要ではないかと感じた。バンコクのホテルのレストランで偶然席を同じくした警察官の青年が自分の腕を私の腕に持ってきて、「日本は何をしているんだ。お前と俺は同じ膚の色。同じ人種だ。日本はもっと東南アジアのことについて考え、行動すべきである。」とはっぱをかけられ、日頃そのような目でアジアを見ていなかった自分をはずかしく思ったものだった。

次に、宗教の問題である。フィリピンはカトリック国、インドネシア、マレーシアはイスラム国、タイは仏教国である。その宗教が国を動かす程の力を持ち、又、国民の一人一人が宗教の下で生活をしているということである。私自身、「あなたの宗教は」と聞かれた時、はずかしながら明確に答えることが出来ない。日本人の中には私のような若者が増えているのではないだろうか。日本の現状はさておき、国際理解の上で、宗教は決して見逃すことの出来ない一要素であることを痛感した。

最後に、一教師として、今回の研修における経験を生かし、日々の教育活動において、生徒達に対して新たな気持ちで国際教育に励んでいく所存であります。